



国際協力事業団  
研修事業部

ARY





# 日中青年の友情計画

18695

JICA LIBRARY



1071127[3]

1987

研管

JR

88-20

国際協力事業団

18995

## 序

21世紀に向けて新たな友情と信頼関係を結ぶことを目的として、昭和61年11月に中曽根前総理大臣により提唱されました「日中青年の友情計画」は、翌昭和62年9月27日、勤労青年、教員、農村青年、青年指導者の4グループから成る100名の青年が来日し、5ヵ年の友情計画の第一歩を踏み出しました。

1ヵ月にわたる招へい期間中、合宿セミナー、ホームステイ、各種施設及び企業視察といった様々な場を通し、中国の青年の皆様には日本の各地ですばらしい出会いをもたれたことと思います。また、日本の生活を直接肌で感じ、見て頂けたことと思います。中国の青年の皆様と交流する機会があった日本の青年の皆様からも、言葉や生活習慣といったものを超えて共感し合えた喜びの声をたくさん寄せて頂き、このプログラムが有意義であったものと大変嬉しく思っております。

本報告書は参加中国青年及び、合宿セミナー参加日本青年、青年を受け入れて下さったホストファミリーの皆様からお寄せ頂いた感想文を中心に、1ヵ月の滞在の記録を掲載したものです。この報告書が「日中青年の友情計画」の様々な場に参加して下さった皆様の思い出のしるしとして、また参加者の体験と感想をより多くの方々に共有して頂くための材料となりますことを願っております。

終わりに、本計画に暖かいご理解とご協力をお寄せ下さいました皆様に心から御礼申し上げます。併せて、この始まったばかりの「日中青年の友情計画」が次年度以降益々有意義な交流プログラムとなりますよう、引続きご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

国際協力事業団  
研修事業部部長  
岡 部 和 夫



# 信頼と友情への第一歩

## 昭和62年度日中青年の友情計画



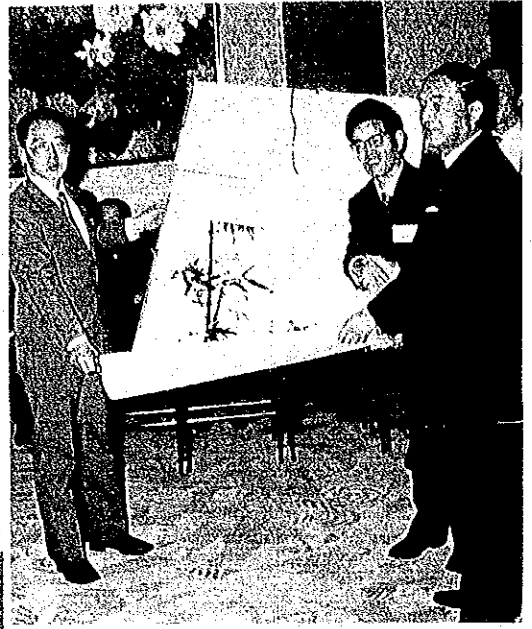
▲中曽根総理挨拶

### 中曽根総理表敬

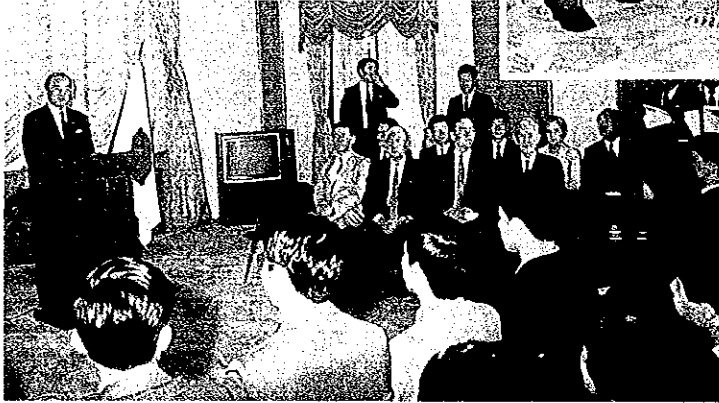
9月29日、100名の中国青年は官邸に  
中曽根総理を表敬訪問

▼中曽根総理表敬記念撮影





孫家利総団長より記念品の贈呈▶



◀中堂根総理の挨拶を聞く  
中国青年





## 日中国交正常化15周年 記念祝賀パーティー

9月28日、100名の中国青年は、日中  
友好6団体の主催する日中国交正常  
化15周年記念祝賀パーティーに出席



中曽根総理大臣挨拶 ▶

章曙駐日中国大使挨拶 ▼

伊東正義衆議院  
議員挨拶 ▼



▼総団長と各グループ団長が登壇して紹介された

# 祝日中国交正常化

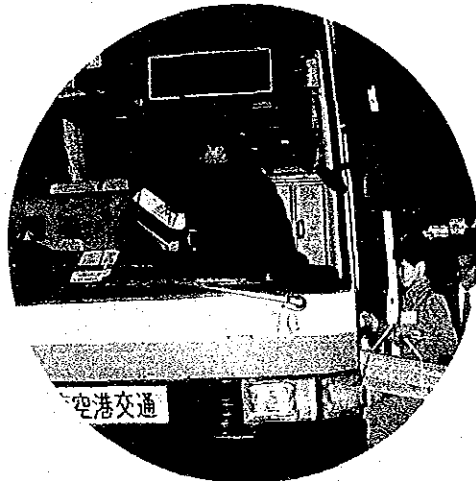


# 成田空港到着

9月27日夕刻、中国青年グループ  
100名は成田空港に到着した



日本滞在の第1歩



▶ 都内のホテルへ向うバスに乗り込む

歓迎会

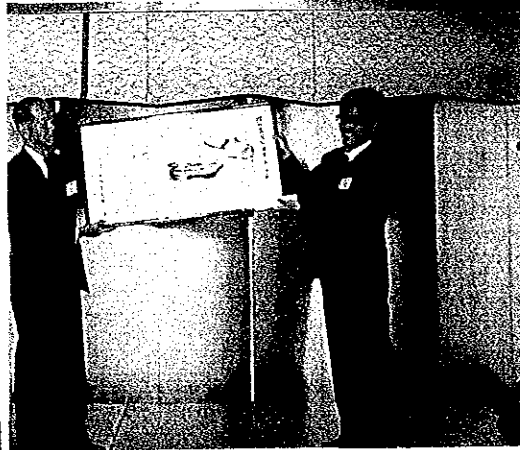


▲ 孫家視総団長の挨拶



▲ 国際協力事業団牟田口副総裁の挨拶

日中青年友  
国際



日中議員連盟

▼ 野田毅衆議院議員の発声で乾杯



共通プログラム

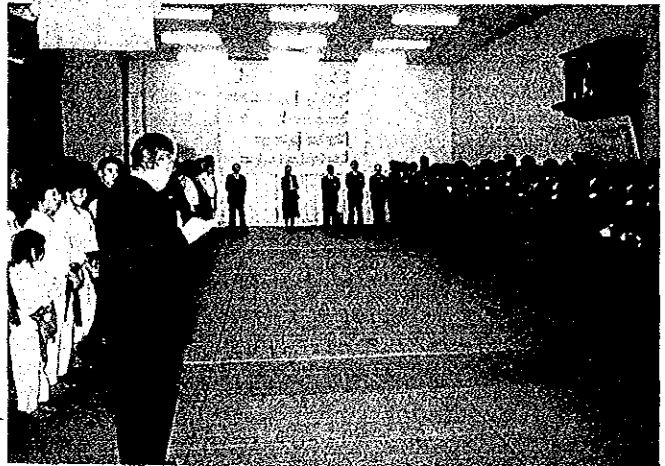


柔道の模範演技 ▶



◀ 体験演武

日本武道館にて武道鑑賞



歓迎の挨拶をする日本武道館 ▶  
木島常任理事



◀ 李剛湖総団長記念品を贈呈



◀ 演武者との交歓風景



◀ 日本武道館本島常任理事と歓談する孫家祖総団長

←早稲田大学中村清教授  
の講義「日本の経済」



受講する中国青年の表情

# 分野別プログラム

▶ 陳少勇団長挨拶



▶ コンピューターの説明を聞く



▶ 学校職員室を訪れ、日本の教員の仕事ぶりを見学





↑ コンピューターの体験操作 ↓

生花を楽しむ ↓



授業参観 ↓





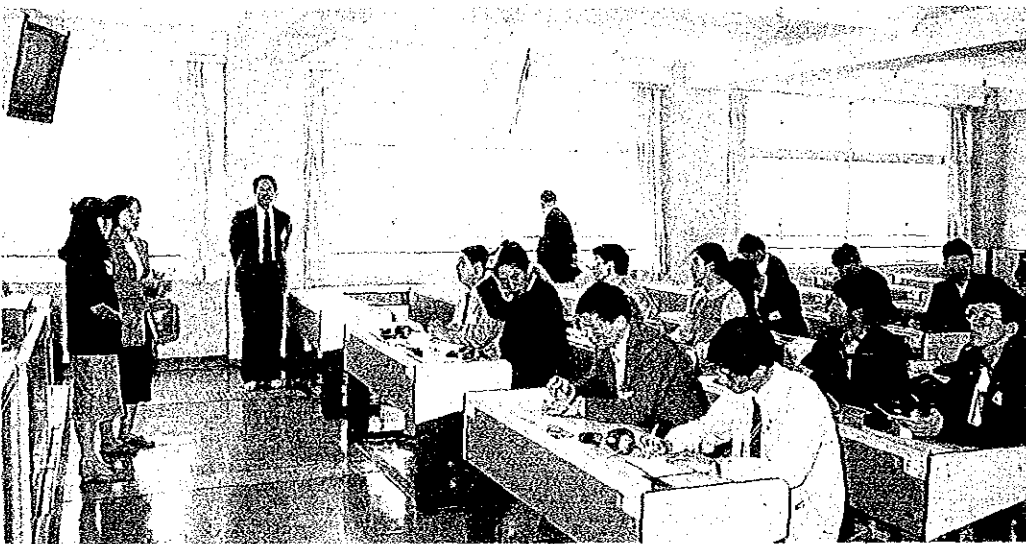


メモをとる中国青年



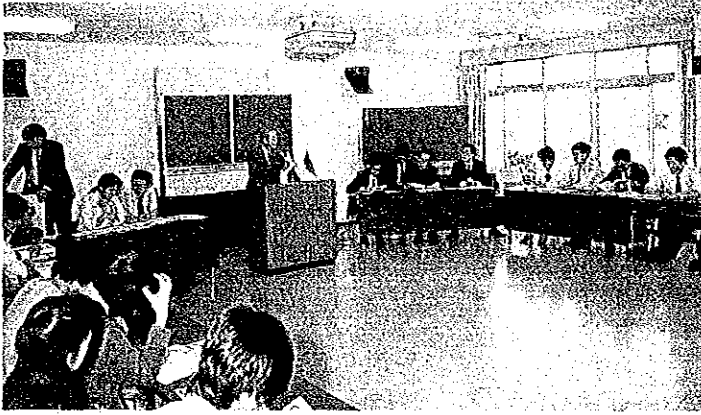
「衣帯水」に拍手

視聴覚教室にて





陳松團長挨拶 ▲



▶ 日本語で自己紹介



▶ 福井県庁表敬訪問



▼ 日本食を味わう



熱烈歓迎中国青年农业考察团



熱烈歓迎中国青年农业考察团



歓迎レセプション



工場の人たちと一緒に

笑顔あふれる意見交換





液体加工工場見学



交流会、郷土芸能に挑戦





◀ トラクターに試乗



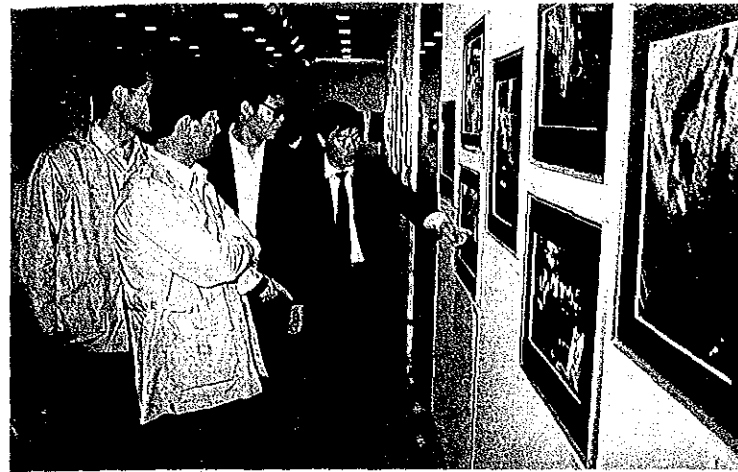
◀ 農業の現場にて



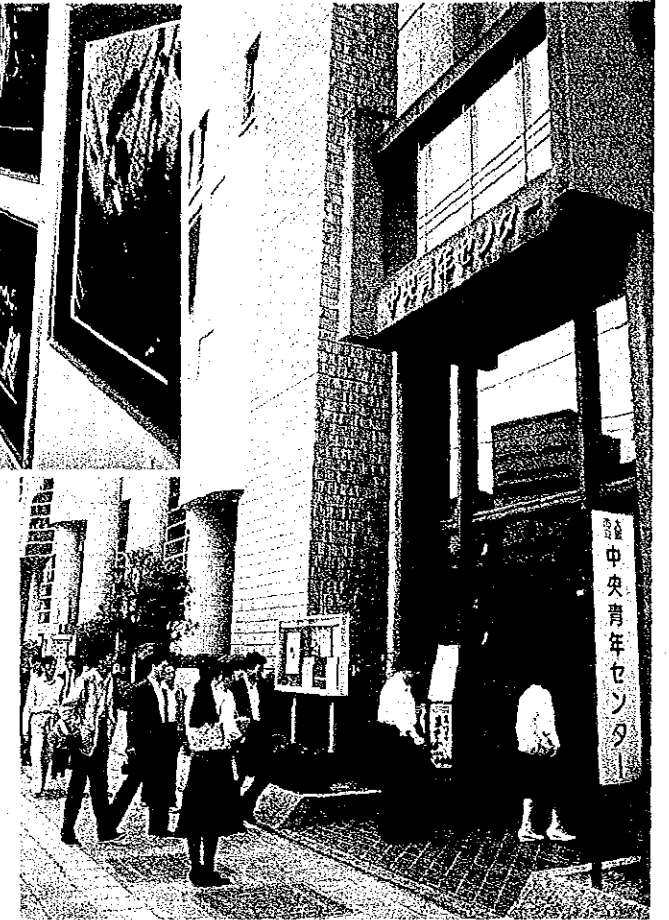
▼ 記念品を贈呈



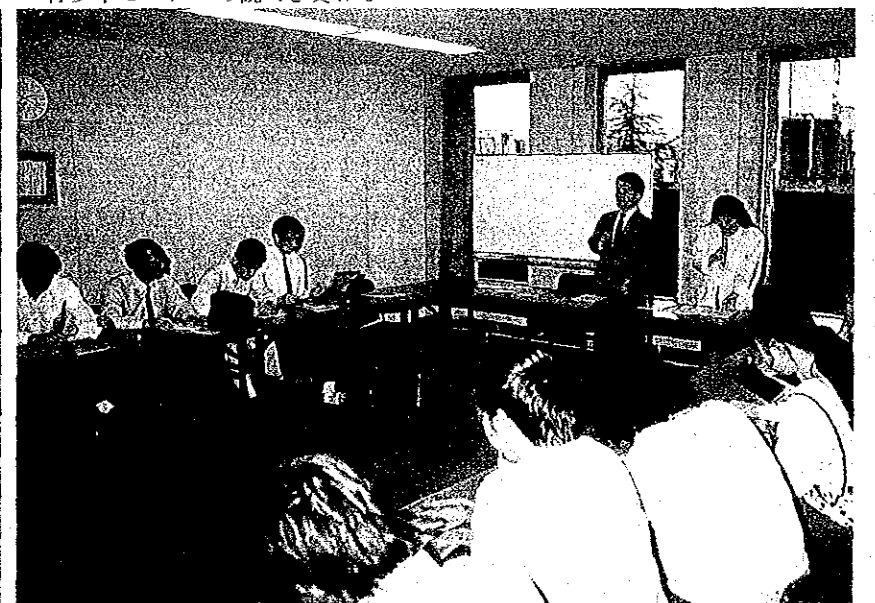
↑ 日中友好青年写真展見学



▲ 日中友好青年写真展見学

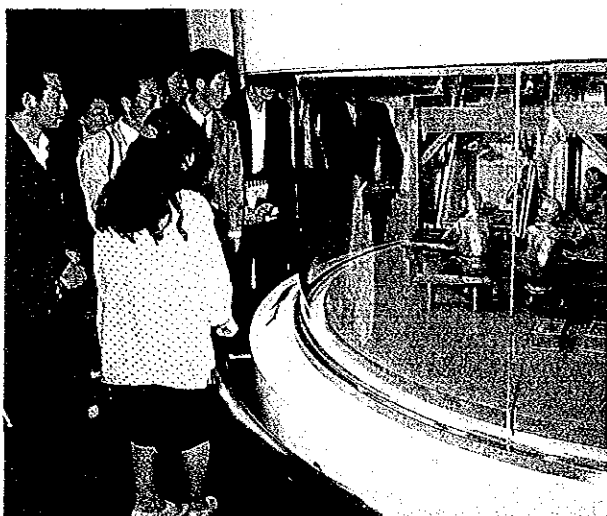


▼ 青少年センターの説明を受ける





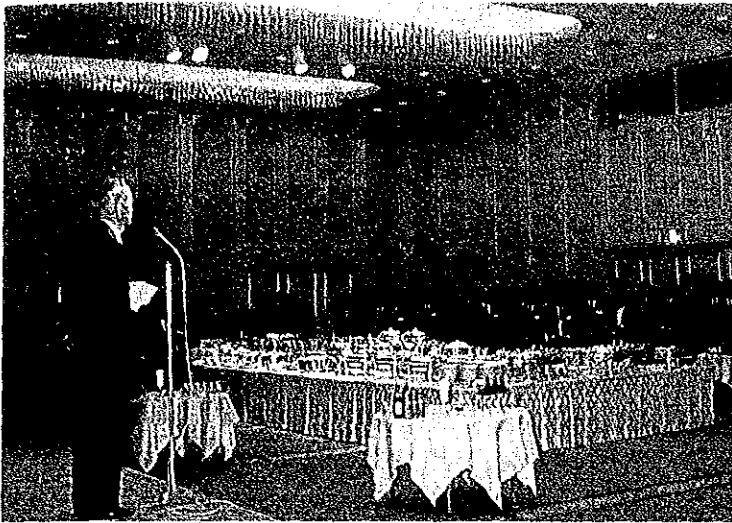
「なごやかに乾杯」



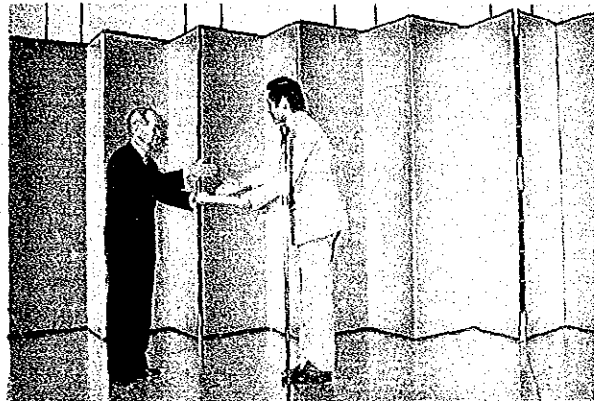
日本の先端技術を見学







▲ 国際協力事業団 牟田口副総裁挨拶(左)  
李剛副総団長謝辞(右)



▶ 固い握手

# 歡 送 会

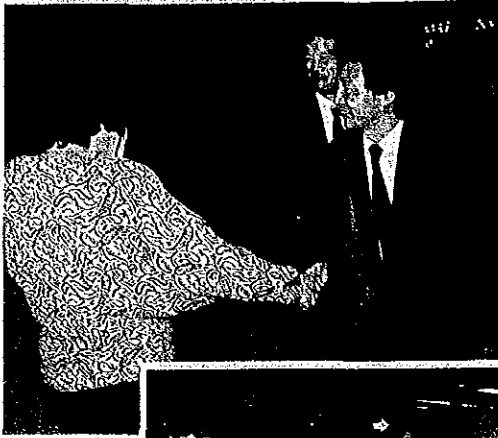
▼ 日本最後の夜





# 帰国

中国青年一行は10月  
27日無事帰国の途に  
ついた



コイデイネーターとの別れの時



出発の手続きを待つ

さようなら日本



# 目 次

## 序 文

### 1. 日中青年の友情計画

(1)計画の概要 ..... 3

(2)実施団体・受入県一覧 ..... 5

(3)招へい青年内訳 ..... 5

(4)実施日程 ..... 6

### 2. 招へい青年感想文 ..... 14

### 3. 合宿セミナー参加日本青年の声 ..... 24

### 4. ホストファミリーの印象 ..... 28

### 5. 招へい青年名簿 ..... 32

### 6. 関連青少年団体住所録 ..... 43





#### ④受入体制

本計画を円滑に実施するため次の二委員会を設置する。

##### (イ)関係省庁調整連絡会議

(i)任務：本計画の実施及び運営に係わる基本的事項につき協議。

(ii)構成メンバー：

外務省経済協力局技術協力課

アジア局地域政策課

文化交流部文化第二課

総務庁青少年対策本部

文部省学術国際局国際教育文化課

農林水産省経済局国際協力課

労働省労働基準局賃金福祉部勤労青少年室

自治省大臣官房企画室

国際協力事業団

##### (ロ)実行連絡調整委員会

(i)任務：実行計画の運営、分野別プログラムの実施及び各プログラム間の連携につき協議し、プログラム実施上の問題につき、国際協力事業団に対し助言。

(ii)構成メンバー：関係省庁より推薦された民間諸団体。

(社)青少年育成国民会議

(社)中央青少年団体連絡協議会

(社)世界青少年交流協会

(社)日本国際生活体験協会

(社)全国農村青少年教育振興会

(社)日本経済青年協議会

(社)勤労厚生協会

(社)ユースワーカー能力開発協会

(社)国際交流サービス協会

(社)青年海外協力協会

(社)国際協力サービス・センター

## (2)実施団体・受入県一覧

分野名	人数	実施協力団体	実施県	地方協力団体
総 団	3	—	—	—
勤 労 青 年	25	世界青少年交流協会	大阪	大阪世界青少年友の会
教 員	25	国際交流サービス協会	長崎	長崎県海外協会
農 村 青 年	25	中央青少年 団体連絡協議会	福井	福井県青少年 団体連絡協議会
青年指導者	22	日本経済青年協議会	滋賀	日本青年国際交流機構

## (3)招へい青年内訳

分野名	男	女	計
総 団	3	0	3
勤 労 青 年	24	1	25
教 員	22	3	25
農 村 青 年	23	2	25
青年指導者	17	5	22
総 計	89	11	100

(4)実施日程

①勤労青年グループ

		プログラム内容				実施場所
		午前		午後		
9月27日	日	来日				東京
28日	月	本計画のブリーフィング	歓迎会	日中国交正常化15周年記念パーティー(日中友好6団体主催)		"
29日	火	自主研修		総理大臣表敬訪問		"
30日	水	講義「日本の社会と風土」		講義「日本の歴史と文化」		"
10月1日	木	講義「日本の産業史」		講義「日本の経済」 武道鑑賞および交歓会		"
2日	金	講義「日本と中国」		日本語会話		静岡
3日	土	合宿場所へ移動 セミナーオリエンテーション		分科会ディスカッション		"
4日	日	講義「日本の青少年事情」		分科会ディスカッション レクリエーション		"
5日	月	分科会ディスカッション		分科会ディスカッション発表会 交流の夕べ		東京
6日	火	富士山観光(五合目)		オリエンテーション		"
7日	水	国会議事堂見学		憲政記念館見学 大蔵省印刷局滝野川工場見学		"
8日	木	歌舞伎鑑賞		東京青年会議所訪問		"
9日	金	日産自動車追浜工場見学		東京証券取引所見学		大阪
10日	土	大阪へ移動		ホームステイオリエンテーション ホームステイ引き渡し		"
11日	日	ホームステイ				"
12日	月	ホームステイ				"
13日	火	大阪市長表敬訪問および大阪市概要説明		大阪城見学 市長主催レセプション		"
14日	水	大阪南港見学		雪印乳業関西チーズ工場見学		"
15日	木	講義「大阪の歴史・文化」		国際交流センター、勤労青少年センター見学		三重
16日	金	シヤープ技術本部見学		伊賀青少年野外活動センターへ移動 意見交換会		"
17日	土	スポーツ交流		日中料理交流会 交流の夕べ		大阪
18日	日	レクリエーション(登山、焼板作り)		大阪へ移動		広島
19日	月	自主研修		広島へ移動		"
20日	火	広島見学(日本タバコ産業広島工場)		広島見学(平和記念公園) 宮島見学		京都
21日	水	京都へ移動		京都見学(二条城、古代友禅苑、ギオン・コーナー)		"
22日	木	奈良見学(東大寺)		京都見学(嵐山亀山公園周総理記念碑)		東京
23日	金	東京へ移動				"
24日	土	帰国準備				"
25日	日	帰国準備				"
26日	月	評価会 帰国に関する説明・諸手続		東京青年会議所訪問 歓送会		"
27日	火	帰国				"

②教員グループ

		プログラム内容				実施場所
		午 前		午 後		
9月27日	日	来日				東 京
28日	月	本計画のブリーフィング	歓迎会	日中国交正常化15周年記念パーティー（日中友好6団体主催）		〃
29日	火	自主研修		総理大臣表敬訪問		〃
30日	水	講義「日本の社会と風土」		講義「日本の歴史と文化」		〃
10月1日	木	講義「日本の産業史」		講義「日本の経済」 武道鑑賞および交歓会		〃
2日	金	講義「日本と中国」		日本語会話		〃
3日	土	オリエンテーション		都内見学（浅草、上野）		〃
4日	日	都内見学（皇居、東京タワー等）				〃
5日	月	文部省訪問		国会（参議院）見学、NHK、銀座散策		〃
6日	火	国立教育会館（総務庁）訪問		大東文化大学訪問、交流会		〃
7日	水	東京都立高島高等学校訪問				〃
8日	木	多摩少年院訪問		横浜見学		神奈川
9日	金	東京大学訪問		相模湖トリム研修センターへ移動 交歓会		〃
10日	土	基調講演・中国青年による講演「中国の教育事情」		日本青年と分科会（フリートーキング） 交流の夕べ		東 京
11日	日	スポーツおよびレクリエーション		東京へ移動		長 崎
12日	月	長崎へ移動		県政・教育事情の説明		〃
13日	火	三菱重工業長崎造船所見学		長崎市立桜馬場中学校訪問 レセプション		〃
14日	水	陶芸の館、陶磁器工場見学		県立国際経済大学訪問・スポーツ交流		〃
15日	木	日本青年との意見交換会		オランダ村訪問		〃
16日	金	長崎県知事表敬訪問		長崎福建友好県省締結5周年記念シンポジウム		〃
17日	土	ホームステイ				〃
18日	日	ホームステイ		ホームステイ受入家庭より集合		大 阪
19日	月	大阪へ移動				〃
20日	火	神戸見学（神戸ポートアイランド）		神戸見学（須磨水族館、海洋博物館）		京 都
21日	水	大阪見学（松下電器）		大阪見学（国立民族学博物館）		〃
22日	木	京都見学（京都大学）		京都見学（清水寺等）		東 京
23日	金	京都見学（古代友禅苑、嵐山）		東京へ移動		〃
24日	土	帰国準備				〃
25日	日	帰国準備				〃
26日	月	評価会 帰国に関する説明・諸手続		歓送会		〃
27日	火	帰国				〃



③農村青年グループ

		プログラム内容				実施場所
		午 前		午 後		
9月27日	日	来日				東 京
28日	月	本計画のブリーフィング	歓迎会	日中国交正常化15周年記念パーティー（日中友好6団体主催）		〃
29日	火	自主研修		総理大臣表敬訪問		〃
30日	水	講義「日本の社会と風土」		講義「日本の歴史と文化」		〃
10月1日	木	講義「日本の産業史」		講義「日本の経済」 武道鑑賞および交歓会		〃
2日	金	講義「日本と中国」		日本語会話		〃
3日	土	農林水産省訪問 中青連役員との昼食会		開会式 オリエンテーション 自主研修		〃
4日	日	勝沼へ移動 マンズワイン勝沼工場見学		移動（勝沼→富士山五合目→青少年センター）		山 梨
5日	月	基調講演「日中間の今後の関係等について」		全体討議Ⅰ 分科会討議（Ⅰ）		〃
6日	火	全体討議Ⅱ		分科会討議（Ⅱ） 交流の夕べ		〃
7日	水	閉会式		移動		茨 城
8日	木	農林水産技術会議事務局訪問（農業研究センター、農業環境技術研究所、食品総		合研究所）		〃
9日	金	久保田鉄工筑波工場見学		施設園芸農家訪問 移動（筑波研究学園都市→ホテル）		東 京
10日	土	福井へ移動 オリエンテーション				福 井
11日	日	六呂師高原訪問（地元青年と散策、バーベキュー、座談会）		（スポーツ交流）		〃
12日	月	県庁表敬訪問 県の農業概要説明		吉川農産加工出荷企業組合鯖江工場見学 歓迎レセプション		〃
13日	火	福井農林高校訪問		福井市農業協同組合訪問		〃
14日	水	福井市中央卸売市場見学 春江町有機堆肥生産組合見学		自主研修		〃
15日	木	畜産農家訪問 東尋坊見学		NEC福井日本電気工場見学 交歓会		〃
16日	金	芝政見学		ホームステイオリエンテーション ホームステイ		〃
17日	土	ホームステイ				〃
18日	日	ホストファミリーより集合		さようならパーティー		〃
19日	月	移動		京都見学（北山杉の里）		京 都
20日	火	三井東圧化学大阪工業所見学		京都見学（ギオン・コーナー）		〃
21日	水	京都見学（二条城、西陣織会館）		広島へ移動		広 島
22日	木	広島見学（マツダ本社工場見学）		広島見学（平和記念公園、原爆資料館、広島城）		〃
23日	金	東京へ移動				東 京
24日	土	帰国準備				〃
25日	日	帰国準備				〃
26日	月	評価会 帰国に関する説明・諸手続				〃
27日	火	帰国		欢送会		〃

④青年指導者グループ

		プログラム内容			実施場所
		午 前		午 後	
9月27日	日	来日			東 京
28日	月	本計画のブリーフィング	歓迎会	日中国交正常化15周年記念パーティー（日中友好6団体主催）	〃
29日	火	自主研修		総理大臣表敬訪問	〃
30日	水	講義「日本の社会と風土」		講義「日本の歴史と文化」	〃
10月1日	木	講義「日本の産業史」		講義「日本の経済」 武道鑑賞および交歓会	〃
2日	金	講義「日本と中国」		日本語会話	〃
3日	土	日本青年館へ移動		日本青年館での開講・歓迎	〃
4日	日	相模湖トリムセンターへ移動		シンポジウム 交流の夕べ	神奈川
5日	月	都内へ移動		中野サンプラザ訪問 交流夕食会	東 京
6日	火	オリンピックセンター見学およびブリーフィング		労働省表敬訪問 オリンピックセンター職員との交流会	〃
7日	水	日野自動車日野工場見学		神奈川県立藤野青年の家見学	神奈川
8日	木	総務庁訪問		榎本製作所見学	〃
9日	金	国立中央青年の家へ移動		国立中央青年の家にてブリーフィング	静 岡
10日	土	富士山登山5合目		人材開発センター富士研修所訪問 歓迎夕食会	山 梨
11日	日	天竜峡へ移動		りんご狩り 飯田青年会議所役員と座談会 交流夕食会	愛 知
12日	月	名古屋サンプラザ館長表敬訪問		名古屋サンプラザ見学 交流夕食会	〃
13日	火	滋賀へ移動		大津市勤労福祉センター訪問 歓迎会	滋 賀
14日	水	県施設見学（図書館、美術館）		信楽焼見学、体験学習	〃
15日	木	大阪国際交流センター訪問		タイキン工業工場見学	〃
16日	金	希望ヶ丘文化公園青年の城見学		滋賀県知事表敬訪問 琵琶湖遊覧 ホームステイ受け入れ家庭へ移動	〃
17日	土	ホームステイ			〃
18日	日	ホームステイ		ホームステイ家庭より集合 さよならパーティー	〃
19日	月	京都見学（清水寺）		京都見学（嵐山亀山公園周総理記念碑、京都太陽の家、ギオン・コーナー）	京 都
20日	火	京都見学		京都見学（西本願寺、二条城）	〃
21日	水	広島へ移動		広島見学（平和記念公園、広島城）	広 島
22日	木	宮島見学（厳島神社、水族館）		自主研修	〃
23日	金	東京へ移動			東 京
24日	土	帰国準備			〃
25日	日	帰国準備			〃
26日	月	評価会 帰国に関する説明・諸手続		歓送会	〃
27日	火	帰国			〃

## 2. 招へい青年感想文

### 富士山に登る

青年指導者グループ

王 雨 順

秋晴れの爽やかな季節に、有名な富士山に登ることができようとは、まったく思ってもいないことだった。

10月のある午後、私たち中国青年視察団は、山中湖の近くにある人材開発センターに着いた。新屋先生のご説明によると、海拔870メートルのところにこのセンターは、研修に最適の場所だそう。また富士山を眺めるのに最もよい場所でもあって、さまざまな季節、さまざまな時間に、ここからはいつも富士山の最も美しい姿を見ることができるとのことだ。果たしてその言葉どおり、センターの1階に着くやいなや、ガラスを通して眼にとびこんできた景色にたちまち魅せられてしまった。絨毯のような緑の芝生とそれを取り巻く樹木が、見事な調和を見せる中に、富士山は一個の宝塔のようにそびえ立っていた。塔そのものはそれほど高くはないが、両側にゆるやかに伸びる長い裾野を形作っている。樹木の間からさし込む光が芝生を斜めに照らし、富士山の麓に絢爛たる世界を創り出している。

センターの人々は私たちを研修ホールに案内し、日本の習慣に従って、こまごまと、しかも真剣に自己紹介をしてから、このセンターの場所の選択、研修内容や施設について、かいつまんで説明してくださいました。ここでは企業人の養成に当たっており、私はそれが富士山に光を添えるような人の養成に思え、どのようになされるのだろうかと思味深かった。けれども一方で、私の思いは窓に映る富士山の美しい姿に、たびたびさえぎられるのであ

った。夕焼けに映える富士山には、真底人を魅きつけて離さぬものがあった。富士山は次第に夜の闇の中に沈んでいく。「明日お客様を迎える支度をしているんですよ」と新屋先生が言われた。

朝焼けの中の富士山を撮るために、明日の朝は早く起きるぞと、一度ならず自分に言い聞かせたのだが、いざ起きてみると、すでに何人かの仲間が、慌ただしげに富士の雄姿をカメラに収めているところだった。

朝食後、不慣れた日本語で「富士山」の歌を口ずさみながら山麓へ行った。この時は少しの風も吹いておらず、また一片の雲もなかった。雄々しい姿の主人は、胸を開いて客を迎えようとしている。「富士山、海拔3776メートル」の看板が眼に入る。名高い富士山が、今まさに眼の前にあるのだ。富士山に登らなければ日本に来たことにならない。この思いが私の心をゆさぶる。

登山は、山の中で育った私にとって、何の苦にもならないことだ。3700メートルもたやすいものである。ましてや郷里からわざわざ富士登山用の靴を持ってきたのだ。2本の足もことのほか軽く感じられる。

私と何人かの仲間たちは、安々と思える登りを開始した。褐色の火山岩が山中に敷きつめられている。数歩登ったところで初めの予想が甘いことに気付いた。

樹木の青々と茂る山と富士山とはまったく異なり、木のある山では1歩進めば1つ足跡をしるしたことになるが、火山は1歩進もうとするたびに何度か滑ってしまうのである。アメリカの友人が「天下の山を征服するのはたやすいが、富士山は踏み入りにくい」との言葉を残したのもなるほどとなすける。

たくさんの人々が富士山に登ったが、誰一人として足跡を残すことはできなかったのである。上に行けば行くほど勾配が急になり、道も滑りやすくなる。碎石が靴の中に入り込み、時として歩きづらい。靴の中の小石を払い落とそう、そうすればもっと軽快に歩けるだろう。ちょっと一息つこう、もっと速く登るために。仲間たちはお互いに引っ張り合ったり押し合ったりしている。笑い声と、歌声と、そして碎石のバラバラと転がる音に、カメラのシャッターを切る音が交じり合う。

数時間後に、私たちは歓声を挙げつつ、とある峰にたどりついた。山頂からほど近いところである。「1枚撮ろう！」中国青年が登山した証しの貴重な写真である。「祖国万歳！」「友情万歳！」の高らかな叫びとシャッターの音が富士山の上空にこだまし、四方にひろがっていく。

この時、私の脈はくが速かったのは、息せき切って登って来たせいだろうか。それとも感動のあまりだろうか。私は富士山に立ちながら、まるで中国の峨眉山を見ているような思いにとらわれた。元気はつらつとした日本の若者たちが、曲がりくねった小道を上へ上へと登っていき、時に立ち止まってはすばらしい峨眉の風光を賞でつつ、緑の林の中に笑顔で写真に取まっている姿が目に見える。彼らはもうじき峨眉の山頂にたどりつくだろう。薄い霧の中で山頂を照らす日の出に出会えることを信じながら。まもなく富士山のとっぺんにたどりつこうとしている私たち中国の青年使節の姿を、彼らもきっと時を同じくして見ていることだろう。私たちの自然に湧き出る笑顔を見ていることだろう。不意に詩が浮かんだ。

峨眉は天下に秀れ

富士は天下に雄々し

両山は兄弟の如く

中日の友情は深し

憶えていよう。しっかりと心に刻んでおこう。  
この日は1987年10月10日、私が満39歳になった日

であった。

1987年10月26日 東京にて

## 平和への祈り——広島平和公園にて

青年指導者

王 小娟

広島平和公園は、42年前人類の歴史上初めて原子爆弾の被害をうけた地域の中心に位置している。秋晴れのさわやかな日であった。午後、私たちはバスで世界的に有名なこの地を訪れた。

広島の街並みは人影もまばらな感じだが、平和公園はうって変わって観光客が列をなし、賑わっていることこの上ない。地元の学生や住民のほか、皮膚の色の異なる外国の客も少なくなかった。

「平和記念館」は深い灰色の建物で、公園の正門に肅然と建っている。館内には原子爆弾が落とされた当時の歴史的資料が陳列されている。見る者の心が痛む写真や遺物の数々……。42年前の、死体の折り重なった無惨な光景がまざまざと描き出されているのである。

公園の中央、木々の緑と色鮮やかな花に彩られて記念碑が立っている。14万人の罹災者の名前を残す石棺がその下に納められている。原爆の碑は静かに、穏やかに、豊かな大地の上に立って、幾多の無辜の魂を昼となく夜となく守り続け、生き残った人々、そして後世の人々に安らぎを与えているのだった。

記念碑の後方にある丸い形をした池の中には、いつまでも消えることのない火が燃え続けている。その火は疲れを知らぬかのように、赤々と灯り続け、ゆらゆらとたゆたう煙は死者を慰霊するとともに、後の世の人を尽きせぬ思いへと誘うものである。

原爆の火のすぐ近くに一人の少女の像がある。「原爆病」とねばり強く闘い続けた佐々木貞子という女生徒を記念して建てられたものだ。今、この

像の前には日本民族の伝統的な祈りのしるし——色とりどりの千羽鶴がうず高く積まれている。何百名もの小学生が像のまわりに立っている。制服を着て、厳かな表情である。代表者が一人、隊列の前に進み出て、深い思いを込めて誓いの言葉を朗読した。この上なく真剣に、そして厳粛に。やがて子供たちのきれいに並んだ列の間からすすり泣きがもれてきた。泣き声は空に響きわたり、いかずちのように人々の心を震わした。

戦争というものの結果はただ1つ、人々に傷跡と災難をもたらすだけである。そしてこの傷跡と災難は、人々の心身に烙印を押したのみであろうか？ 戦争の張本人たちは地獄でこのことを知っているだろうか。

川の向こうに原爆ドームが眺められる。原爆のすさまじさをしのばせる6階建ての廃墟である。幾歳月の風雨に耐え、今なおしっかりと大地に足を踏みしめている。歴史の証人として、後世の人々に昔日の惨状を静かに伝えているのである。42回の春夏秋冬が過ぎ去り、原爆ドームは対岸にたずむ数多くの旅行者を、深い思いへと誘う。

突然、微かな笛の音が耳元に響いて来た。音のする方へ行ってみると、記念碑の前の石段に数十名の小学生が笛を手にして立ち、私が今まで聞いたことのない曲を見事に吹いていた。そのメロディーは時に高く時に低くなり、連綿として泣くかの如くであった。コーディネーターの馬場さんと寺澤さんが、この曲は「原爆許すまじ」というのだと教えてくれた。この天真爛漫な次の世代の、心から平和を願う叫びがその場にいた多くの旅行者にも伝わって、人々の眼に熱い涙をあふれさせたのだった。

子供たちの傍を離れ、人の流れに身を任せるようにして、道端の芝生に入った。芳しい緑地が大きな絨毯のように樹木のところまで続いている。赤ん坊を抱いた若い母親や、年輩の人たちが芝生で憩いながら鳩に餌をやっている。公園の上空を

飛び回る数知れぬ鳩たちは少しも人を怖がらず、人なつこく旅行者の肩や頭や手に止まっている。

この一幅の絵のような光景を眺める時、ここがかつて原爆によって砂漠と化したことを誰が想像できよう。

恋々としてその場を去るにしのびない心を抱きつつ、公園の出口へと向かった。見ず知らずの人々がお互いに目と目を見交わして会釈し合う。見知らぬ同士、しかしある意味では見慣れたまなざしで、共通の祈りを伝え合っているのである。すなわち平和への熱愛と切望を。この共通の感情こそが、それぞれの地域から人々をこの地へと足を運ばせ、期せずしてここに集わせるのである。人類はまさにこのような祈りの中で安らげく生きていくのであり、世界もまたこの祈りの中で明日に向かって進むのである。

帰途に就くと、夕日が1日の最後の輝きを大地に降り注ごうとしているところだった。バスの窓から、沈みゆく夕日に映える広島城の、山青く水は緑に澄み楓の赤く色づいたさまを見つめながら、あれこれ思いが乱れて心を静めることができなかった。不意に、陳松団長が先ほどノートに書き残した深い味わいのある言葉を想い起こした。——世上に名高い土地、辛酸をなめつくした土地、人類を深い思いに導くに値する土地。

さらば、平和公園よ。私たちの地球が、これからも永遠に広大な銀河の中の大いなる平和の園であらんことを願いつつ。

1987年10月21日（水）晴

## 相模湖で中秋節を祝う

青年指導者グループ

張 国 棟

葛 小 光

房 恩

相模湖水は明月を抱え

研修所からは楽しげな歌声が聞こえる  
 静かな山林は何ゆえこのように賑やかであるのか？  
 異なった言語は何故このように混り合えるのだら  
 うか？

中日青年が中秋節を祝い  
 両国の友人が収穫を話す

1皿1皿の水餃子

中国の味

日本の材料

あなたも1つ、私も1つ

美しい祝いの気持ちを心に留めておこう

1杯1杯の清酒

友もよく飲み

私も飲む

その香りは本州に漂い黄河を流れる

1曲1曲の歌が人の心を酔わせ

1つ1つの舞が湖を浪立てる

星々は喜びに目を開き

山々は嬉しさに腕を繋ぐ

この人々を感動させる情景が残されますように

この神奈川という豊かな土地に残されますように

日中友好の歴史に記されますように

雨雲は月の側から吹きさり

爽やかな風が吹きこむ

歌声は悲哀はなくなり

舞い姿にひるみは見られない

友好の樹はすでに葉を繁らせ

緩みない努力はすでに大きな成果をあげた

霧は二度と光を遮ることはない

大海原をも私たちを隔てることはできない

友よ、友

来年の中秋節はどうなるのか

さらに美しき詩、さらに甘き歌

さらに紅き紅葉

そしてさらに妙なる月の光を

## 見たこと思ったこと

農村青年グループ

来 楽 春

中国青年代表団農村グループの一員として、この1カ月の視察に参加し、その間、日本の歴史、文化、工業、農業の発展についての講義を聞き、また、農業研究機関、工場と農村を訪問した。これらの活動を通じ、これまで間接的であった日本に対する認識が、直接的なものとなった。

この1カ月の視察中、私にとって最も印象深かつ最大の収穫は、富士青少年センターで行なった合宿セミナーと、福井県でのホームステイである。どちらも、期間としては決して長いとはいえないが、その短い時間での体験は、日本の農業、農村の青年、および農村の社会を構成する人間、家庭について、理解を深めるものとなった。

富士青少年センターでの合宿セミナーでは、中日双方の青年が、互いの農業の情況、農村青年の仕事、学習等一連の討論を通じて交流を図った。双方の青年が興味を覚えた問題は、あるものは以前はただ資料のみで知るだけで粗削りな知識であったり、またあるものはまったく知らない問題であったりした。この度の交流によって、私は、日本の戦後における農業の発展、政府の農業政策、農業協同組合の役割りと意義、農家の喜びや、憂慮等について深く知ることができた。

日本青年との接触の時間は十分とはいえなかったが、彼らが比較的高い文化的素養と強い競争意識、勤勉さ、責任感を備えており、より良い物質生活のために、くじけずに頑張っている様子に、私は深い感銘を受けた。ただし、日本の農業は小規模で、コストが高く、農業従事者の前途には暗いものがあるといえよう。私が思うには、日本の

農民の生活はすでに比較的裕福になっており、また、四方八方に伸びる道路や車などの交通手段の発達によって、農村と都市は近くなっている。また、農業機械の導入により仕事の効率を高め、労働力の軽減をはかっている。この点から見ても農村と都市との差は縮まったが、これらは彼らの長年の苦勞と努力により得られた結果である。

列車やバスの中から、沿道の山地丘陵に植林地が広がっている様子が見られる。私は日本の植林地の正確な面積は知らないが、沿道のそれを見るに、現在の農民および過去の諸先輩の、山地丘陵の緑化に対する努力を思い浮かべることができる。

今、中国は正に開放という改革の途中で、現代化へと向かっており、中国独自の特色ある社会主義を建設しようとしている。この偉大な目標の実現のために、正確な政策と中国人一人一人の貢献が必要であり、そのためには犠牲もまた、止むを得ない。

1ヵ月の視察において、私は一種の緊迫感を覚えた。帰国後、この緊迫感が、自己の学習と仕事を変革する原動力となるよう願っている。同時に、私の身近な人々に、中国人民の中国人民に対する友好感情を伝えたい。それだけでなく、わが国の開放という改革において、4つの現代化の実現の意義および、その過程において我々がなすべきことについて、1歩進んだ理解を期待したい。

私は中日両国の世々代々にわたる友好を願っている。

1987年10月24日

## 中日人民の友情の永続を願って

農村青年グループ

馬 成 江

人類の永遠なる平和、世界に満ちる愛、これらは今世界に住む一人一人が守るべき基本原理であ

り、各青年が奮闘すべき共通の願いである。平和を愛する一人一人の、たゆまない努力が必要である。

正に、このような願望を胸に抱いて、私は福井県高屋町の専業農家、田谷満さんの家に2日間ホームステイをした。短い期間であったが、田谷家は幸福と愛情に満ちている家庭で、父親は田谷清治さん61歳、母親は田谷照子さん59歳。彼らは年配にもかかわらず、自分たちの畑で一生懸命汗水を流して働き、現在の満ち足りた幸福な家庭を築いていた。田谷満さんは今年37歳、やり手で能力のある男性である。毎日朝4時に起き、福井市中央卸売市場に新鮮な野菜を出荷している。彼の妻、美千代さんも農家で生活を手ぎわよくこなす良妻賢母である。彼らには12歳になる長男、9歳になる長女の2人の子供があり、ともに勤勉で天真爛漫な宝である。

田谷家の皆さんは、誠実で、友好的で、泊めていただいた我々2人に対し、可能な限りの配慮をしてくれた。お互い、言葉は通じなかったが、歴史的な漢字が存在し心を通じ合わせるにこと足り、直ぐに親密な友人関係が生まれた。我々は故郷を遠く離れてはいるが、主人一家の熱情的な歓待に心の温かみを感じた。

我々が、パンダを刺しゅうした壁掛けを田谷満氏に送った時、田谷家の母親は感激した様子で、両手でこの平和の使者を受け取り、永遠に家宝とする事を約束してくれた。美千代夫人が私に、娘の愛ちゃんが私の娘のためにかいてくれた絵をくれた。絵のすみに「馬小路 你好 愛 1987. 10. 18」の字を見つけた時、中日人民の間の友好が誠実で、平和友好への努力と責任が我々の肩の上であり、後世の人々にも影響があるということをしみじみと感じた。

歡送会の席上、私と田谷満氏は抱き合い、涙が押さえ切れなかった。福井を離れる最後の時、田谷家の皆さんが駅のホームまで送りに来てくれた。

列車が動き始めた時、皆さんは、私に向って、列車の窓越しに一生懸命手を振って送ってくれた。私も同じように、それに答えた。彼我の間にはただ友情のみが満ちていた。このような名残り惜しい情景は、いつまでも鮮やかに目に浮かぶことであろう。

愛と平和が中日人民を結ぶ絆であり、世々代々に友好を築く事は、両国人民の共通の願いであり、世界の進歩と発展のために欠くことのできない要素である。平和と愛のために、中日人民の友情が永続することを願います。

1987年10月23日

## 忘れがたい農家

農村青年グループ

李 玉 妹

わずか2日間の農家生活ではあったが、私に忘れがたい素晴らしい思い出を残してくれた。

私たちのホームステイは、福井県坂井郡坂井町の海道久孝氏宅である。

海道久孝氏は今年27歳、彼の妻敦子さんは25歳、両親はともに50歳余りである。4人家族は150頭の食用牛の飼育場と布加工工場を経営しているほか、少しの土地を耕やしている。生活様式から判断すると、比較的裕福な家庭である。

ここで、私にとって一番思い出深いのは、お客に対しての厚いもてなしと温和な友情あふれる態度である。海道宅の玄関を1歩踏み込むと、ご主人の言葉と行動が暖かく我々をつつんでくれた。敦子さんは生活用品を1つ1つ熱心に紹介してくれた。そして私たちのためにふとんを敷いてくれた。「国語大辞典」を出してきて、話をしながら、一方で書き、一方では身振りで、私たちと心ゆくまで話を交わした。生活の中において、私たちはまったく窮屈さを感じなかった。ご主人がアレンジしてくれた日程は実に充実したものであり、余

韻が限りなく残っている。

外出から戻ってくると、ご主人と私たちは、約束することなく一緒に「ただ今」と言っていた。お別れする晩に、ご両親が敦子さんに、住所を書いてある封筒を私たちに渡すように、そして帰国してから必ず手紙を書き、一家の写真を送ってくれるように、と言われた。私たちは偶然知り合った同士であり、過ごした時間も短いけれど、互いの友情、信頼、誠実な心がすぐに相通じた。

それから最も思い出深いのは、彼らが勤勉で辛抱強く、聡明でよく働く人たちであったこと。飼育場は久孝夫妻によって管理されており、こちらの牛はすべて生後20日のもを買ってきたものである。というのはこういう牛は比較的安いからである。1年と8ヵ月まで育て、体重が700~800キログラムほどになった時、売りに出す。牛を売りに出すときに自家用車を使用するが、これは、コストを下げるためである。

敦子さんはこの家では忙しい人である。彼女は毎日一家のために食事をつくる。毎日2回、牛に飼料を与え、毎週1回牛舎を清掃する。牛舎へ行って、買ってきたばかりの子牛をすべて彼女が育てる。子牛には2回の飼料のほかに1回のミルクが必要である。久孝氏の話では、子牛が少ないと、彼女は楽になるということだ。彼らはいつも牛にブラシをかけなければならない。そして牛の体型を保つために、腹部が垂れている牛をつれて散歩をする。

久孝夫妻はよく勉強し、牛を飼育する技術を研究している。敦子さんと私たちが、スーパー・マーケットへ買い物にいったとき、彼女の歩くのがひどくせわしかったのは忙しいからなのだろう。2人のお年寄りは布加工工場のほうを担当しておられる。彼らは4人の従業員を雇い、久孝さんの母親は彼らとともに10数時間働かなければならない。総じて一家の人は皆、毎日の仕事時間が10時間以上である。



農家の建物には民族的特色が備わっており、室内の豪華な装飾を見たり緑の庭でそぞろ歩いたとき、私は農家の裕富さと美しさを感じた。これは確かに彼らの勤勉さと懸命さから生まれたものと痛感した。

さらに私たちの興味をひいたことは、この一家の趣味の広さと楽観的な明るい性格である。彼らには昼間神経の張りつめた忙しい仕事があるだけではなく、喜びの夜、楽しい生活もある。海道家の余暇の生活は、バラエティーに富んでいる。ざっと計算して、4人で十幾種の趣味がある。和忠さんはマージャン、野球、ボウリング、古典詩、最近では坂井町で行われたゴルフ大会で賞をとっており、彼の奥さんは、書道、手編み、生け花、盆栽、若い2人は各種の球技場へよく行く。敦子夫人はきれいな木製の人形作りもする。そして1本のタオルでカンガルー、うさぎなどの動物をつくる。一家の共通した趣味は旅行である。ある時私たちと車に乗っていると、交差点で信号が赤にかかり車を止めた。道路に他の車が走っていなかったため、和忠さんは早々と車から下り、信号機のボタンを押した。その時のしぐさがとてもおかしくみんなが大笑いをしたことを覚えている。

何と楽しい農家であろう。食卓での私たちの笑い声、牛舎、工場の中での笑い声、球技場、ゲーム・センターでの笑い声、この甘美な笑い声、あの裕福、美しい農家の庭、慈悲深くて優しい面持ち、せわしい若夫婦の足どり、それと、てきぱきしている仕事ぶりが、ずっと私の脳裏に残っている。

海道氏宅を離れての道中で、私は古い詩を思い出した。「天下で己を知り、空の果ては近隣の如く。」中日両国間には一つの海の隔りがあるのみで、願わくば両国の人民が世々代々友好であることを。

1987年10月23日

## 訪日の感想と決意

勤労青年グループ

朱 国臣

日本政府のお招きにより、中国青年代表団の一員として、しかも日本で一番美しい季節の9月27日から10月27日の間、東京、熱海、大阪、広島、京都、奈良などの地を訪問できた。1ヵ月という時間は短く、体験出来たものも少なく不確かだが、中国の新しい時代を担う青年指導者の一人として、さまざまな感銘を受けた。

日本民族は、よその国の長所をとり入れる創造性に富んだ民族である。その昔、日本民族は中国の漢字を取り入れ、そこから独特の文字を作り上げたし、西洋の民主制度を取り入れて自国の政治体系を作り上げたり、また欧米の力を借りて自国の高度成長を成し遂げたりした。日本は欧米と財産の所有制は同じ形を取りながら、独自のやり方を取っている。たとえば年功序列の賃金体系や終身雇用制などである。正にこの吸収力と創造性に富んでいるという特徴が、中国に比べて歴史も短く、資源もあまり豊かでない国を、短期間に高度成長させ、世界経済の中でも実力のある国にしたのだ。

現在、日本人の平均月収は30万円とか。中国の7000元以上に値し、大変な収入である。中国が日本に学ぶべき所はたくさんあるが、一番大切なことは、日本が高度成長を成し遂げた時の国内条件、国際条件、政策と経験を深く研究することである。それをさらに一歩進めて、中国の実情に合った、学ぶべき所、参考になるものを探さねばならない。日本民族のこの吸収力と創造力は我々中国青年が見習うべき最も大切な点である。

現代の日本人は真面目で、高い資質を持った民族であり、きれい好きな人々だ。10月2日の夜、ほかの団員と一緒に池袋の街を散策した時見たことだが、小路の片側に1平方メートルぐらいの穴

が掘られていた。作業している人は交通を気にしながら、掘削機が地面に接触する所をシートで厳密に囲み、水を撒き、土ほこりが立たないように仕事をしていた。これは日本人がいかにまじめに仕事をするかを物語っている。

東京では1200万人の人間がおり、出入りの人も多く、またたくさんの車でひしめきあっている。それなのに、行列や人々が押し合っている所は街では見かけることはなかった。例外を除いては車のクラクションや喧騒も少なく、交通規則はよく守られていた。街は大変清潔で、人々に清々しい感じを与え、落ち着いた気持ちにさせてくれる。ごみはきちんとビニール袋に入れて、整然と一定の場所に置かれ、車で運ばれてゆく。社会秩序もよく、喧嘩をしている人を見かけない。東京は大がかりな防犯システムがあるとのことで、あちこちで警備の車が待機しているのを見かけた。

日本は都市空間をうまく利用している。ほとんどのビルが地下まで使っている。そして地下街も商店も交通網も十分に発達している。しかもビルの屋上にプールがあったり、スポーツ施設を作ったり、花を植えたりもしていた。

日本人はとても勉強好きである。7、8歳の小学生がバスを待つ合間に、または静かな小路、至る所で本に見入っている姿を見かけた。電車の中でも本や雑誌を読んでいる人が多勢いた。明治維新以後、日本はすぐに義務教育制度を実施したように、教育をたいへん重視している。

日本では森林保護もよくなされている。国土のほぼ全域が緑に覆われていて、禿げ山を見つけ出すことは困難である。日本の国全体が大きな花園のようで、その美しさに心を打たれる。日本人の仕事と生活の中から学ぶべき所は、口先だけでなく行動を重んじる誠実さ、自分を律する素晴らしい品性である。私たちも見習って中華民族の資質を高めたいと思う。

日本の大、中企業は、所有権と経営権が分離さ

れている。株主の利益と従業員の利益には矛盾もある(当然共通の面もある)。経営者は双方の利益と、短期長期の利益をうまくまとめるのだ。この点は我々が短期的に何をやるべきかを決める時に、よく考慮しなければならない問題である。日本は中小企業が大多数をしめている。一つの株式会社を設立するには、国の法律に従い二つの条件がある。まず8人が出資する事、次に1人が最低5万円出資する事、資本金は40万円以上であること。こうすると大勢の株主ができるのである。

日本人はどうしたら自分の仕事がうまくゆくかを常に考えている。お客を満足させるのも同じ考えからだ。サービス業で言うと、単に自分の労働と商品を売るのではなく、さらに接客態度も含まれるのである。日本の社会では、自分と他人の利益をうまく調和させている。日本の小企業経営の中から、政策さえ間違っていなければ、たとえ経営面積の小さい農家でも、機械化を達成できるということを学べる。私が見たいいくつかの企業では、あるベルト・コンベアーは停止していたり、動いていても特別に効率が高いとは思えないものもあった。それなのに高い経済効果を上げているのは、企業家が効率を追求しているためだと思う。

日本は国土が狭く、中国の26分の1に過ぎない。日本は1億2000万もの人口を有し、中国と同じくらい人口密度の高い国である。日本は地下資源が少なく、石油はすべて輸入に頼っているし、国内の市場も限られている。中国は国土も広く資源も豊かで、市場性も高く日本とは対照的である。歴史的に見ると日本は外国の援助で自分の国を築き上げてきたが、中国はその反対で、外国からはいつも破壊を受け、発展を阻まれ続けてきた。日本には先進的な科学、技術、管理方法とマクロ、ミクロ経済の豊かな経験があるので、それを学ばなければならない。中国には豊かな資源と大きな市場があるのだから、日本にとっては魅力があると思う。

日本にも問題がないわけではない。たとえば一人暮らしの老人のこと、青年が国の前途に無関心なこと、円高の日本経済への影響など。だから中国の国情に合った所を選び、1歩1歩着実に日本の経験を学ぶべきだと思う。

今回の訪問を終了するに当たり、私は次の2つのことをしなければならないと強く感じた。1つは中国の改革と開放のためにつくそう、そしてもう1つは中日両国の子々孫々にわたる友好のためにつくそう。

1987年10月26日 日本東京にて

## 矢野家でのホームステイ

勤労青年グループ  
張 偉

矢野さんの第一印象は、私の経験から、きっとやさしい人だと思った。でもホテルから矢野家までの車中は、会話が途切れがちだった。これはやはり国の違い、民族の違いからくるのであろう。私と通訳氏は、何とかこの索漠とした雰囲気打ち破ろうと試みた。察するところ、矢野さんもきっと同じ思いをされたことだろう。

1軒の瀟洒な家の前で車が止った。「着きました」と矢野さんが遠慮深げに言った。出迎えてくださったのは、矢野夫人で、美しい貴婦人である。彼女は日本民族独特のやり方で、私たちをお客としてもてなしてくれた。突然、私たちの儀礼的な会話は、一人の元気な娘さんによって中断させられた。矢野さんの末娘の充美さんである。これは紹介されるまでもなく、すぐわかった。彼女は中国語をいくつか知っている。たとえば「你好」と「謝々」のたぐいだ。

充美さんの出現で、急に和やかな楽しい雰囲気になった。私たちは家庭的なムードに浸ることができた。残念なことは充美さん自身は、中国のことをあまりにも知らないのである。それに比べて、

矢野さんのお父さんは高齢にもかかわらず、中国にとてもくわしい。その後、私は大勢の青年に出会ってわかったことは、充美さんは他の青年に比べると少しはわかっているほうに属するということだ。

夜になって、私たちは共にタタミの上に座り、歌を歌ったりして、ますます打ちとけることができた。その中で私は、やはり現実の問題を思い出さずにはおれなかった。日本の多くの中高年の方は中国に対して心から仲よくしたいと思っている。しかし、青年、特に「新人類」と呼ばれている世代は、この友好を受け継いでゆけるだろうか？ 私はこの問題をいろいろな場面で提起したことがあるが、日本の友人、特に青年はまじめに考えて、答えてくれた。21世紀の中日両国人民友好の樹は、現代の人々が育て上げるべきで、特に青年の責任は重大である。

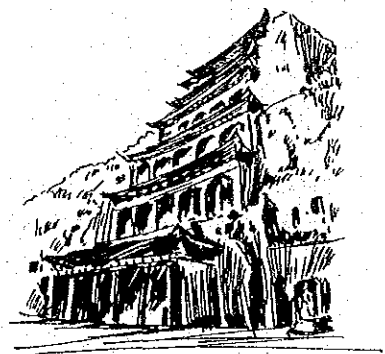
誠意を持って人に接すれば、相手からも誠意を得られるものである。何日かの滞在で、充美さんと彼女の美しいお姉さん芳栄さんとも友だちになれた。彼女たちの中国語も、なかなかのものになったし、その上簡単な中国語で手紙まで書いてくれた。行間ににじみ出ている思いを感じ取った時、私は日本の青年と中国の青年は仲の良い友だちになり得ると確信した。

矢野さんは実業家である。視野も広く、関心事は事業のことで、食事をする時もホテルでも話題はいつもこれである。彼の案内で彼の鉄工所を見学させてもらった。高いレベルの技術と進んだ管理方法で経営されていた。「アメリカ人のお客が見えた時は許可しなかったけれど、あなた方なら良いです」と言い、写真を撮らせてもらった。このほかに7つの企業を持っているということだった。でも、鉄鋼部門の前途はあまり楽観できないそうだ。彼は外国で企業を経営したいとっていて、私に「中国の投資環境について御存知ですか？」と聞かれた。彼は何度も中国に行かれたそうだが、

あまり情報をつかんでいない様子だった。私は中国の投資に関する政策や、ここ数年来外国企業の投資状況を紹介した。すると彼は実業家の度量で、1ヵ月後には訪中し、この方面の状況を調べると即断した。私はこの態度に敬服してしまった。中国の企業家もきっと敬服するに違いない。私は矢野さんの家の客として来たのに、商売の話をしたりすると、日本の友人は羨に思うのではないかと心配だったが、矢野さんは、こういう実質的な話しをしてこそ、真摯の証明であると言われた。私もこの考えに同意した。

はじめは、お互いに遠慮し合っていたが、2日後は自分の家にいるようにくつろげた。ホームステイが終わってからも、大阪にいる間、毎晩宿へ訪ねてくださった。時には家族も連れたりして……。ビールをついで皆で座ると、また矢野家にいるような気分になった。最後にお別れする時、充美さんと芳榮さんの目から別れ難いという思いと、「私は中国にきっと行きます」という言葉を読み取った。

すでに私は矢野家において、ただのお客さんという概念を越えたと思っている。



石窟(敦煌)

### 3. 合宿セミナー参加日本青年の声

#### 意義深い合宿

東京都・学生  
渡辺 邦子

「21世紀のための友情計画」に参加するのは、今回の中国教員グループとの合宿で6回目である。(過去、シンガポール2回、インドネシア、ブルネイ、フィリピン各1回。最多参加者かな?)

今までの6回の合宿の中で、今回が一番有意義で充実していたように思う。その大きな理由は3つある。1つは、中国人よりも中国語ができる優秀な通訳の方が5人もいてくれたおかげで、グループ別討論、パーティーなど、夜遅くまでの雑談を通じて、心ゆくまで尋ねてみたいことや、日本事情の説明ができた。2泊3日が、こんなに有意義に短く感じられたことはなかった。合宿後、思い出してみると、中国の教員の方と私とが1対1で話したかのような錯覚に落ち入るほどで、通訳の方々が黒子に徹してくれたということだろう。

2つ目の理由は、この夏、実際に中国に行っただけで自分の目で相手の国を見てきているということである。広い中国を駆け足で1週間見てきただけだったが、行ったことのある国とない国とでは、興味の持ち方も違うし、こちら側から、中国で見た日本との違いを話の種にし、さらに深い話し合いを進めることができた。

そして3つ目は、日本と中国との文化の共通点を再確認させられる場面がいくつもあり、(中国側も日本側も期せずして横笛を持参。福建省の方がお茶の歌を披露し、私も静岡出身なので「茶つみ」歌をお返しに歌った。中国のある地方の教え方が日本の五と九の音に似ているなど。)中国文化が日本に与えた影響の大きさに、同じ文化的背景を持

つ者同士という気が非常にした。

中国は、政治、文化大国であり、時間はかかるだろうが、今後は経済大国へと進んでいくだろう。よきライバル、友人としてお互いに発展していくことを願う。

#### 中国の青年と接して

光岡 英理

中国は、距離的にも歴史的にも日本に一番身近な国である。しかし、私は中国の現状をあまり知らなかった。また中国は社会主義国で、日本と社会形態が違うからか、関心も少なかった。しかし、この合宿セミナーで中国に対する見方は変わり、親しみ深い国になった。そして、少しではあるが、中国の社会や中国の人のことを学び知ることができた。

分科会ディスカッションにおいては、それぞれの国の生活習慣について討論した。家族構成は日本と同様、核家族化の傾向にあるが、社会福祉制度が整っており、個人を重視し、人権を尊重する国だということがわかった。たとえば、国が主婦に対して給料を出したり、子どもの養育費を出したり、老人に対しても隣人たちが世話をしたりしているようだ。また家族で過ごす時間を多くとっているのも特徴的である。しかし、1人子政策や住宅難など問題点もあるように思われた。

冠婚葬祭については地域差があり、一言で言うことはできないが、都市周辺部は割合地味で農村は派手なようである。これは、日本にも見られる現象である。

余暇の過ごし方については先にも述べたように、家族とともに過ごすことが多い。文化会館、体育

館などの施設、水泳、登山など戸外へと、活動の場はさまざまである。その他、仕事仲間との娯楽も多いようだ。しかし、日本よりも余暇時間が少なく、忙しい毎日を送っているように思われる。

中国は、生活時間や暮らし方など、日本と相違していることが多く、これからの日本の生活についても、考えさせられることが多々あった。

レクリエーションや交流会では、日本人も中国人も、同じように身体を動かし、笑ったりしていた。「言葉は通じなくても、心で通じ合える」ということを実感した。

最後に、このセミナー中に中国の人と接して感じたことを書こう。それは、中国の人がとても誠実で前向きな姿勢で物事を見つめ、感情も豊かであるということだ。また、中国人は、日本人に対して友好的だった。私たち日本人は大いに中国人の人間性を学ばなければならない。そしてこれを機会に、中国に、そして世界に、目を向け、交流を深めていきたい。

## 合宿セミナーの印象

山口県

水谷 安延

隣の国でありながら、今まで接することのなかった中国の方々と4日間も生活を共にできたことはたいへん良い経験となりました。

はじめは言葉もまったくできないし、国の事情も十分理解していませんでしたから、どうなることかとたいへん心配でした。その上、中国の方が腹を割って話をしてくさるだろうか、お互いが満足できるディスカッションにできるだろうかとも思いました。

しかし、中国のみなさんはとても明るくオープンで国を越えた青年同士の友人として、非常に有意義な時を過ごすことができました。

以下、ディスカッションで、特に印象的だった

ことをあげてみましたが、聞くことすべてが新鮮で、今の日本の教育問題の処方箋として参考になることばかりでした。

(1)「若い世代が国を発展させる」という信念が中国の方々に、はっきりと読み取れました。今回来られた方が、特にエリートだからということも言えるかもしれませんが、それにしても、日本にはそういう考えをする若者も年輩の方も、非常に少ないというのが実感です。

(2)「飛び級」「学位取得試験」で、子どもの能力が十分に伸ばされるとともに、各学年ごとの「進級試験」で、日本で言う「落ちこぼれ」は少なく能力に合った教育が行われています。この制度は、子どもの一人一人をより良く活かすために、日本でも参考にしたらよいと思います。

(3)中国の若者は、受験の目的が、はっきりしています。しかし、日本では、ただ単に、上級学校に行くためだけで、日本の受験地獄は無意味と思われれます。

(4)中国では「模範家庭の表彰制度」があるとのこと。このことを、子どもの成長にふさわしくない家庭の増えた日本で取り入れれば、多くの親への警鐘として役に立つように思われます。私の市でも、まず実施してみたいと思います。

最後に裏方としてお世話された方々は、たいへんご苦労だったと思いますが、どうもありがとうございました。

## この合宿セミナーで学んだこと

山口県

鬼武 系子

これからの5日間に対する不安はほとんどなく、代わりに期待のほうが大きくふくらむ。中国青年との交流はもちろんだが、私にとって日本青年との交流も、この合宿セミナーに参加した1つの目的であった。

汽車等の疲れで初日はさすがに早目にやすんだが、あとの日はどこかの部屋でずっと話をしていたように思う。特にディスカッションの発表のあと5日の夜は話したいことがたくさんありすぎて、ずっと話し通しだった。

中国青年とのディスカッションは、お互いの国の青年活動の紹介みたいな感じになってしまい、相互の問題点等について、意見交換をしたいという私の希望はかなえられなかった。日本で行われているものと、中国の青年活動のしくみとにかなりのギャップがあり、どうしても日本の青年活動を理解してもらえなかったのはとても残念だった。中国の青年活動として紹介された活動は、日本の場合におきかえると、公益法人が行なうようなものではないかという気がした。

次の日は共稼ぎについて話しあい、中国では社会制度が万全で女性が働くことに関してとても協力的だという事実を知った。なぜ女性が働くか？という質問には予想どおりの答が返ってきたが、反面親子のスキンシップや情操教育などの面で問題がででくのではないかと、という気もした。私が日本人だから生じた疑問であって、他の国からすると問題にもならないような疑問なのかもしれないが（実際中国青年はそれに対して問題意識を持っていなかった）、今でも私の中ではくすぶり続けている。

全体を通して、中国青年の向学心と熱意とを、まざまざと見せつけられた合宿だった。それは彼らのある一面であり全部ではないかもしれないが、このような人たちが集まればすごいパワーが発揮できることだろう。それが今の私たちに不足しているものだとも感じるが、裏返してみると今の状態だからこそ得られる「何か」もあるのでは、という気もしてきた。

この合宿で感じたこと学んだことは、文章にしてまとめられるものではないし、1晩中話したとしても足りないくらいの量だ。まだまだ書きたい

ことはたくさんあるが、頭に焼きついた中国語のイントネーションや彼ら一人一人の顔を忘れないうちに、中国の農村部の青年ともっと話をしようと思っている。

## 合宿セミナーの思い出

戸田 裕紀子

高校の哲学の授業で「無知の知」という言葉がありました。知らなかったという事実を知ることです。この合宿セミナーに参加させていただき、この言葉の意味がやっと理解できました。

政治経済の違い、そこから起こる仕事や企業、そして自国に対する考え方の違いも改めて感じることができました。狭い日本の中で常識に思っていたことが常識だったのではなく、それしか知らなかったのが常識だと思い込んでいたようです。中国の皆さんはとても日本について勉強されていました。私もお隣の国、親しみの持てる中国について、もっともっと勉強したいと思います。

用意してくださったプログラムはもちろん、プログラム以外の点でもたいへん工夫されていました。たとえば、相手国語での自己紹介。上手下手より、少しでもお互いの言葉で自分を分かってもらえる喜びは、冷や汗の出る思いをして文章を作り発音の練習をして、やっと得ることのできる感動でした。少しぐらい文法がおかしくても相手に通じてしまうものなんですね。（「私は北京の工場です」のように……）

もう1つは中国の方といっしょに食事をする。緊張してご飯が喉を通らないのと、筆談したり単語を調べているうちに、そちらのほうに一生懸命になってしまい食事を忘れてしまいました。でも、私の下手な中国語を理解しようと箸を休めて聞いてくださったり、発音を教えてくださったり、ご自分や中国の色々な事を丁寧に説明していただいたり、ととても貴重な時間でした。中国の

人々は親切で朗らかで、皆さん可愛がってくださり、心から感謝しています。

また、親切に色々なことを教えてくださったのは、中国の方ばかりではありません。様々な職業に携わっている日本の皆さんのお話を聞かせてもらっているうちに、ぶどう屋さんや花屋さん、写真家や市や町の職員、学校の先生になったような気がしました。大半は中国人になった気分でしたが、それぞれのお仕事の喜びや苦労などのお話をしていただいたり、国際交流やそれ以外の色々な知識を教えていただくばかりで、私から皆さんへあげられるものが何もないのは悲しいことです。

このセミナーの素敵な思い出はずっと大切にします。そして寒い北海道で、今度はもっと皆さんのお役に立てるよう、私の力量の範囲ではありますがお手伝させてください。

熱海での3泊4日を思い出すと、また涙がでてきそうになります。

## 私の感動を子供たちへ伝えたい

大分県・教師

足立 反子

「果たして自分にものが言えるか」——初めて今回のようなセミナーに参加するにあたって、かなり不安を抱いていた。教育だの文化だのを国家的な視点ではしゃべれない……。不安は的中した。結局自分の周囲のことだけしか話せなかった。中国の教育の進むべき道を堂々と述べる彼らに比べて、私が話すことは単なる希望的観測にすぎなかった。

思うに、日本にはあふれるほどの情報がありながら、それをうまく活用していないということだ。情報を整理し、その上で自分なりの意見を構築することの大切さを思い知らされた感じだ。結局側面からしかものが言えないと、伝えようとする意見もあいまいになる。あいまいな表現は、誤解を

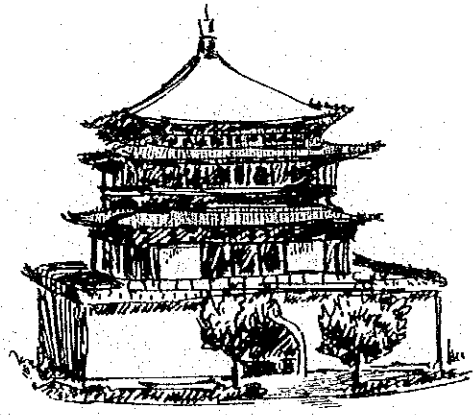
招くおそれもあるだろう。学ばなければならない、もっともっと。

次に私が考えさせられたのは、感情表現の仕方である。彼らは本当によく笑い、大声で話し、そしていつも興奮していた。だから言葉はわからなくても彼らの感情はストレートに伝わってきた。いつの間にか私も彼らに巻き込まれ、身ぶりがずいぶん大きくなり、学校に帰ってから子供たちの笑いを誘っている。しかし、これは大切なことなのだ。言葉という壁を越えるためにも。分科会で彼らが意見を述べる時も、私の意見を聴く時も、通訳の方を見ずに、常に私たちを見ていたことも印象的だった。言葉を越え、表情から何かを感じ取ろうとしてくれた彼らの熱心な眼差しを、私はきっと忘れないと思う。本当に視野の広がるセミナーだった。

慌しさの中で、何度かやめたいと口に出した教師の仕事も、今回ばかりはこの喜び、反省を伝える相手のいることをうれしく思った。あれから1ヵ月近くになるが、ことあるたびに話している。

「世界に出なさいよ。世界のいろんな国々の人と語りあっても恥ずかしくないマナーと、知識を身につけなさいよ。」

子供たちはキラキラした目で、早くその日が来ればいい……というような顔をして私の話を聞いている。



鐘樓(西安)



## 4. ホストファミリーの印象

### 我が家に中国青年を招いて

長崎県・公務員  
森 草一郎

「ニーハオ！」これが私のできる唯一の中国語である。その私が中国青年を二人、10月16日から2泊3日で我が家に迎えることになった。迎えたのは中国教育視察団の尹さんと蔣さん、北京と上海から来た撥刺とした好青年である。しかし二人とも日本語はまったく話せない。私たち家族は中国語は話せない。あまり不安なので昼間は少し中国語が話せる友人に来てもらうことにした。しかし夜と朝はどうなるだろうか。

「案ずるより産むが易し！」これが私たち家族の結論である。コミュニケーションは、片言の英語と身振りとして筆談である。中でも筆談は効果があり、かなりの内容まで話し合えた。もちろん日本と中国は同じ漢字とはいえ書き方も意味もかなりの違いがあるが、それを承知で書いてみるとお互いに理解できるところが多い。談話の時間はもちろん、食事でもバスや電車の中でも、次々にメモに書いて出しては、交換する。これで日本と中国の政治、経済、文化等の話から暮らしや遊び、食べ物や結婚の話までつきることなく筆談は続いた。彼らはとりわけ給料と物価のことに興味を示し、市場に入っては魚や野菜や果物の単価を熱心に1つ1つたずねるので、思いがけず私も日本の物価調査をする羽目になった。また私の給料袋を参考までに見せたが、差し引額のところで説明がつかず、しどろもどろになったりした。最後に「日本、高賃金、高物価」と書くと、しきりにうなずいてくれた。そして筆談のメモ紙は3日間で100枚を越える量になった。

初めてのホームステイなのでちょっと緊張の3日間であったが、隣国の有為な青年と直に話すチャンスができて、私たちもとても勉強になり少し中国通にもなったみたいだ。今後もできる限り様々な国の若者を我が家に招いて交歓をしてみたい。



### 花の種をお土産に！

長崎県・主婦  
高橋 悦子

カーネーションの花を、さもいとおし気に毎日何回も手にどって眺めては、「この花大好きです」と言う中国の青年を我が家に迎えた。過去において、各国からの若者が、長崎での足場として、風のように我が家を吹き抜けていった。が、正式なホームステイは初めてである。たかが5年くらい学んだ中国語で、どの程度の接待ができるものかと、かなり緊張と不安で当日を迎えた。彼らの興味はどうしたら満足させられるだろうか？ ホームステイは責任重大なのだと初めて気づいた。

特別被爆者であり、昨今風化しつつあると危くされている原爆のことだけは知って欲しかった。事前に彼の地へ足を運び、しっかり翻訳してから、彼らを案内した。しかし彼らは他の観光地にはあ

まり興味を示さなかった。

また、前日親戚で葬儀があったので、頼んで参列させてもらった。部屋から溢れんばかりの献花に眼を見はり、いたいけな幼児の死に手を合せて冥福を祈ってくれた。パパである彼らと傷心の若い両親との語らいは、優しさに満ち溢れ「愛と悲しみに圍境はない」と痛感した。

翌日は折よく美容師の友人が、結婚式前日の写真撮りをするということできつた。可憐で初々しい花嫁と照れながらの記念撮影、お色直しの色物の華やかなドレスは、彼らの眼には異様に映ったようだ。「中国のウェディング・ドレスは白ですよ」と耳元で私にささやいた。花嫁衣装の着付けからかつらまで、本当にめずらしそうであった。彼らが「知らない」と言うことは皆体験させてやりたかったが、丸々2日間では、いかんともしがたかった。整形外科の治療室、パチンコ、大衆焼鳥屋、古い形式のスタンド・バー等々。その場に居合せた誰もかれもが皆優しかった。気易く声をかけ握手を求め再会の約束を交す。「今本当に平和なんだなあ」と身にしみて感じた。街では何軒も花屋をのぞき花の種をさがす。そして彼らは素直に提案してくれた。「帰ってお昼寝がしたい」その素直さが最高に嬉しかった。

別れの際に、彼らは異口同音に言った。「日本に来て、あなたの家にいたこの3日間は、一番自由で一番ゆっくりできた。謝謝！」と……花の香りがどこからか匂ってくるようなお礼の言葉であった。「謝謝！」と嬉しそうに買って帰った日本の花の種が、あなた方のお国で美しく開くことを祈ります！

## 中国の何を知っていたか……

滋賀県・看護婦

左近 百合子

今回の交流の場で、いかに中国のことを知らな

いか思い知らされた。日本の一番近くの国でありながら、日本人は中国人の外見しか見ていないと思った。彼女の「中国の何を知っていますか」という問いかけに対し、「人民服、中国料理」と答えた。すると、彼女から「人民服などない」と返答がかえってきた。人民服というのは、日本人が便宜上、作った言葉であるとわかった。今まで中国のことは、学校での社会の授業やテレビで見たくらいである。いくら中国人はこういう考え方をすると人から聞かされても、自分勝手にゆがんでってしまうため、実際に話をしてみないことには、本当の中国人はわからないと思った。そして、同時に、もっともっと、日本人は中国人のことを知り理解していかななくてはならないとつくづく感じた。

また、今、中国が次々と新しい文化をとり入れ、一つの転機を迎えていることを、彼女らの服や食べ物から感じた。服は私たちが着ているものかわらず、食べ物もさし身、サンドイッチなど何でも食べた。

我が家に滞在中、祖母が朝晩仏壇の前で念仏をとなえる様子を、興味深く見ておられた。彼女の家でも同じことをやっており、中国の自分の家のことを思い出したということだった。また、祖母が自分で作った花ぞうきんを、手ぶり身ぶりで説明し、おみやげにと手渡している場面を見て、人と人とのふれあいをしみじみと感じた。

今回のホームステイをひきうけて、本当によか



ったと思っている。彼女らを通して学んだことは言葉にはおきかえられない貴重な体験であり、今回の交流の場をワン・ステップとして、今後ますます国際的視野を広げたいと思うしだいである。

## 筆談コミュニケーション

滋賀県・公務員

大谷 日登美

今回、日本青年国際交流機構滋賀県支部を通じ、中国の方のホームステイをお引き受けすることになりました。

英語が通じない方と聞いてどうして話をすればよいのかなと考えました。当方もさほど英会話ができる訳でもないのですが……。中国語会話の本を見ながら、どうにかなるだろうと思いつつも、「お一人だけお迎えするので大丈夫かな。かなり山の中の家でびっくりされるのでは」など、相手の方が困らないかと心配もしておりました。

歓迎会の席で通訳の方を通じ話をすると、とても明るい方で、「私はどんなところでも生活できる」と話され、安心してお迎えすることができました。その歓迎会で筆談することで、随分思いが通じることを知りました。漢字を書き並べることで大体理解し合えるのです。そこでたくさんのメモ用紙を用意してお待ちしました。彼女は中国語を話しながらきれいな字で質問などを書いたりします。こちらも日本語をしゃべりながら漢字を書き答えます。彼女は日本語を、こちらは中国語を少しずつ覚えながら楽しく会話が進みました。もちろん食事中も、出かける時もメモと鉛筆と基礎会話の本を持ったままです。

彼女が、日本のことをより深く知ろうとしておられるのがよくわかりました。日本の生活のこと、経済のこと、中でも税金のことなど、中国にはないようなので特に興味深く聞かれました。それと同時に自分の国のことを愛し、よく理解しておら



れるのです。どんどんメモ用紙に字が並んでいきます。彼女はそのメモ用紙を示しながら、帰国するとき記念に持ち帰りたいとも書きました。お互いに言葉が通じれば、より深く理解し合えることはもちろん可能ですが、筆談がほとんどの状態でもコミュニケーションができたことを嬉しく思いました。(ただしこれは中国の方だからよかったです。)

## 招へい青年との交流で得られたこと

滋賀県・公務員

青木 聡

私はこの中国青年の民泊を引き受けたことによって、他の引き受け家庭の方にはなかったものを得たと思っています。それは、私は民泊引き受け人であると同時に、今回の民泊地滋賀での最後の夜の「サヨナラパーティー」の実行委員をしていたからです。

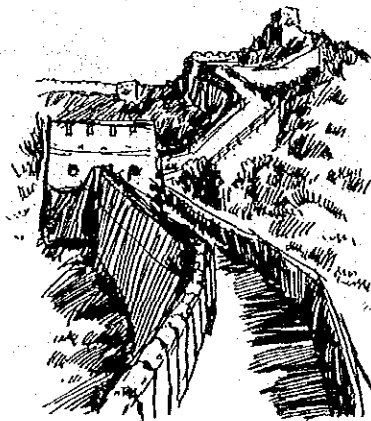
中国青年の方に民泊地での最後の夜を思い出に残るものにしてもらおう。また、思い出に残るもの以上に、これからの日中の友好関係をより強めるものにしてもらおう、と微力ながら努力してきました。その結果がパーティー終了後の涙でした。この涙の中には、3日間家族の一員として生活してきた別れる寂しさはもちろん、自分の実行してきたパーティーによって、この地を日本での最高の思い出の地にしようと思うと同時に、今後



の友好親善が増々強められるに違いないと確信する気持ちが含まれていました。

最初は、あまり深い意味もなく軽い気持ちで引き受けた民泊ではありましたが、今となっては私の生涯に大きな影響を与えてくれたものとなっています。このような素晴らしい経験を一部の青年しか味わうことができなかったことを非常に残念に思いますが、中国青年の方が中国へ帰られて青年指導者として頑張っておられるように、私たちもこの経験を広く多くの青年に伝え、今後私たちが生きていく世の中を築いていくためのワン・ステップにしていきたいと考えています。

最後に、私にこのような素晴らしい経験をさせてくださった中国青年の皆さん、日本人関係者の皆さん、本当にありがとうございました。



万里の長城